

近代經濟学史

杉本栄一著

近代経済学史

杉本栄一 著



岩波全書 175

杉本栄一

1901年東京に生れ、1952年東京にて死去。
1925年東京商科大学卒業、理論経済学・
統計学を専攻。1929-32年まで文部省在
外研究員として独、伊、米に留学。一ツ
橋大学教授。

著書：「理論経済学の基本問題」

「近代経済学の基本性格」

「近代経済学の解明」等

近代経済学史

岩波全書 175

1953年3月14日 第1刷発行
1977年1月20日 改版第1刷発行◎
1979年1月20日 第2刷発行

¥ 1000

著 者 すぎもと えい いち
杉 本 栄 一

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 雄 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき

この書物は、杉本栄一君の未完成の絶筆である。

普通の場合には、著者自身が、その著書にまえがきを書き、そのなかで、著者みずから、著書の基底にあるもの、問題への著者のアプローチの仕方、著者の意図するところ、著者の構想、著者がその研究の過程において何かを負うている人々への感謝の言葉その他を述べることになっている。

しかし、この書物の場合は、まれな例外である。著者は、校正刷をまえにしながら、突然発病して急死したため、誰かほかの者がまえがきを書かなければならなくなった。友人たちの意向にしたがって、私がそのまえがきを書くことになったのは、私の教師生活における最もふかかなしみの一つである。

著者は、あまりめぐまれない境遇のなかにありつつ、そのつきつめた研究意欲と、純真な人格と、うるわしい友情と、忠実なねばり強さにもとづいて、語学力を強化し、研究の視野を拡大・深化し、その取材を up to date とし、戦後日本の学界の革新のためには行動をもって尽力し、また経済学および経済学史とおして、二十世紀半ばの世界についての認識を深めるの

に寄与した。今、突然にこの著者を失ったことは、いろいろな意味で、この国の経済学界の大きな損失である。

著者は、大学および学会活動に非常に多忙であったが、この書物を書くためには、そのこの時間を文字どおり *ausnützen* (極力活用) し、人を避けるために転々と作業場をうつして、その全精力をこの書物に集中した。

著者が校正をおわらなかった本が、こうして出版されるようになったのは、数人の友人たちと門下生諸氏との献身的な努力の結果である。著者の一友人としての私は、この努力にたいし、ここで、読者とともに、ふかく感謝しなければならない。

一九五三年二月二十四日 未明

大塚金之助

(一九七六・五・三十)

目次

まえがき

序章 経済学史の本質と課題	一
---------------	---

素材集成としての経済学史 経済理論の自己展開としての経済学史 歴史的発展の反映としての経済学史 経済学史の本質と課題

簡単なブック・リスト——近代経済学(四)

第一章 近代経済学の成立前史	二七
----------------	----

第一節 古典経済学の問題	二七
--------------	----

近代経済学の前史としてみた古典経済学 資本主義生成期の経済学としての古典経済学 古典経済学の第一の問題、安定的な経済体系としての資本主義体制——スミスの自然価格論と労働価値論 第二の問題、労資間における階級調和の体系としての資本主義体制——前期古典学派およびスミスの分析とリカード

オの發展理論 地代論争とリカアドオ經濟學の勝利
ブツク・リスト——古典學派(二) スミス(三) リカアド
オ(二五) マルサス(三五)

第二節 古典學派解體の事情……………三

第一の事情——周期的恐慌の襲來と販路説 第二の事情——勞
資間における階級闘争の激化と階級調和論 古典學派の解體と
近代經濟學の成立——ケムブリッジ學派およびマルクス學派の
成立 オーストリア學派の成立 ローザンヌ學派の成立

第二章 一般均衡理論の展開……………四

第一節 限界効用理論とオーストリア學派の形成……………四

近代經濟學史を限界効用理論から始める理由 附、限界効用理
論の先驅者 個別經濟的消費合理性の確定(効用遞減の法則お
よび限界効用均等の法則) 限界効用理論の三つの形態(メンガ
ー、ジェヴォンス、ワルラス) 限界効用理論の主流としての
オーストリア學派 超越的論理主義的方向(メンガー)と經驗心
理主義的方向(ボエーム・バヴェルク、ウィーザー) ボエーム・
バヴェルクの利子論および生産構造論ならびにかれの社會主義
に対する態度 オーストリア學派の分配論(帰屬説および限界

生産力説) 費用の問題

ブツク・リスト——メンガー(五三) ジェヴォンス(五四) ワ
ルラス(五五) オーストリア学派一般(五六) ボエーム・バヴェ
ルク(六二) ウィーザー(六五) 帰属説および分配論上の限界生
産力説(六五)

第二節 機械的經驗主義の徹底とローザンヌ学派の選択理論の展開…………… 六

効用の可測性とワルラス バレートの選択理論 限界効用理論
の完全な放棄 価値驅逐論と經驗批判論 バレート以後のロー
ザンヌ学派 ウィーン・ロンドン・シカゴ系の現代自由主義經
済学の系譜 オーストリア学派の貨幣的景氣理論 經濟計算論
ブツク・リスト——バレート(六九) 無差別曲線論(七一) バ
レート以後のローザンヌ学派(七〇) ロンドン学派(七九) シカ
ゴ系の反ケインズ派(八〇) ミーゼス、ハイエク(八一) 經濟計
算論(八五)

第三節 個別經濟的均衡分析の完成と社會經濟的均衡

分析の經驗的妥当性…………… 七

一般均衡理論の指導精神 古典学派における個人 オーストリ
ア学派における個人 限界効用論の欠陥と後期ローザンヌ学派
の選択理論の成立 個別經濟的な均衡分析の完成 一般均衡理

論の分析用具としての構造 一般的均衡理論の現実妥当性 社会経済的均衡に関するワルラスの予備的摸索の論理およびその経験的妥当性——自由競争資本主義の時代と独占資本主義の時代

ブツク・リスト——ローザンヌ学派的限界生産力説(九四)
限界代用率の理論(九五)

第四節 一般均衡理論の動態分析とその限界……………一〇五

シムペーターによる経済静学の拡張——循環および成長の理論
シムペーター静学の限界と動学の問題——発展の理論
レオンティエフの投入・産出分析 ムーア、シュルツの計量経済学的方法 シムペーター流の方法とムーア流の方法との本質的同一性——静学動学の二元論および趨勢波動分析の機械的分裂 次章の問題

ブツク・リスト——シムペーター(一〇五) レオンティエフ(一一二) ムーア、シュルツ(一一三)

第三章 新古典理論の展開……………一二七

第一節 ケムブリッジ学派の発展とケインズ学派の形成……………一二七

古典学派の解体とミルの問題 ケムブリッジ学派の歴史的課題

マーシャルの経済学 ビグーの経済学 ケインズの経済学
アメリカ経済学界の情況とケインズ経済学輸入の素地 附、制
度学派とアメリカ的限界経済学 ケインズ経済学の輸入とアメ
リカ・ケインジアン イギリス・ケインジアン 古典学派と新
古典学派との異同

ブツク・リスト——ジョン・ステュアート・ミル(二八)
マーシャル(二三) ビグー(三七) ケインズ(三三) 制度学派
(三四) アメリカ的限界経済学(三五) アメリカ経済学史(三六)
ハンセン(三六) 後期ケインズ学派(三九)

第二節 新古典学派の巨視的動態理論とローザンヌ学派

の静的均衡理論との差違……………(四三)

新古典学派の方法的特質としての巨視的動態論 マーシャルの
動学的一般理論とシムペーターの静動二元論との相違 マー
シャル経済学における時間の構造 マーシャル経済学における
空間の構造 異質的経済構造の理論 短期正常および長期正常
ブツク・リスト——不完全競争論(四五)

第三節 巨視的動態理論の最近の發展……………(五五)

ケインズにおける乗数理論と移動均衡理論 ケムブリッジ学派
の景氣理論——ロバートソン、ホトリー スウェーデン学派

の経済学——ウィクセル ウィクセル以後のスウェーデン学派 後期ケインズ学派の発展方向——動学化と長期化 加速原理の導入 加速度原理と乗数理論の総合 均衡論的景気変動理論(サムエルソン・ヒックス・グッドウイン型) 矛盾理論(ハロッド・ドマル型) 均衡論的景気変動理論と矛盾理論との相違点 巨視的分析と微視的分析との矛盾(一般均衡理論と新古典論との相違点) 巨視的分析の原理としての安定条件論 総計の問題——マーシャルとクライン、メイ、ブー

ブツク・リスト——乗数の理論(二五〇) ケムブリッジ学派の景気理論(二五〇) スウェーデン学派の経済学——ウィクセル(二六〇) カッセル(二六〇) その他(二六二) 加速度原理(二六三) 均衡論的景気変動理論(二六四) 矛盾理論(二六五) 安定条件論(二七六) 総計の問題(二七六)

第四節 新古典派の厚生経済学と価値の理論……………一八

規範的と経験的との実践的統一 ローザンヌ学派の立場とケムブリッジ学派の立場の相違 新古典学派における「価値の理論」「厚生」と「効用」「快適程度」と「生活程度」 新古典学派価値尺度論とその前提としての経済世界の構造 ケムブリッジ学派的な市場構造論の要請する測定論の性格 マーシャルの価値測定論 ケインズの価値測定論 独占資本主義社会における測

定論の性格 実践的經驗論的価値論としてのマルクスの労働価値論 実践主体の相違に基づくマルクス学派と新古典学派の価値論の性格

第四章 マルクス理論の展開……………104

第一節 マルクス学派の形成とその発展……………107

本章の問題 新古典派の基本性格とマルクス学派の基本性格
一八四〇年代におけるマルクス、エンゲルスの業績の意義 自由競争資本主義の分析 独占資本主義および帝国主義の分析
Ⅰ、修正派と正統派との対立 Ⅱ、社会民主主義派と共産主義派との対立 資本主義の一般的危機および社会主義建設の分析
新古典学派に対するマルクス学派の影響
ブック・リスト——一八四〇年代におけるマルクス、エンゲルスの業績(二三) 弁証法的唯物論および史的唯物論に関するマルクス、エンゲルスのその他の諸著作(三七) マルクス、エンゲルスの国家および政治論(三〇) 『経済学批判』について(三三) 『資本論』について(三四) 『剰余価値学説史』について(三六) マルクス、エンゲルスの全集または選集(三六) 『資本論』研究に関する主なる著書(三七) 社会民主主義的な系譜に属する主要著作——カウツキー(三九) ヒル

ファーディング(三三) その他の主要著作(三四) 共産主義的な系譜に属する主要著作——カール・リープクネヒト(三五) ローザ・ルクセンブルグ(三五) レーニン(三六) スターリン(三九) ブハーリン(四〇) ヴアルガ(四一) 第二次大戦以後におけるソヴェト経済学界(四二) 新古典学派に対するマルクス学派の影響(四三)

第二節 新古典派経済学に対するマルクス経済学の特徴

本節の主題 資本制蓄積の現実過程に関するマルクス経済学
分析——資本の有機的構成の高度化 資本の蓄積、集積、集中
信用および競争の作用 産業予備軍の形成とその運動 平均
利潤率の傾向的低落 周期的恐慌の現実過程 プロレタリアー
トの自覚的階級形成 マルクス学派とケインズ学派との類似点
および両学説の根本的対立点——I、ケインズ学派の景気循環
理論とマルクス学派の周期的恐慌理論 II、ケインズ学派の修
正資本主義論とマルクス経済学の体制転換論 マルクスの周期
的恐慌理論の過少消費論的解釈の誤り 周期的恐慌理論と価値
論の必要

ブック・リスト——調和的恐慌理論(二六) 過少消費説
(二六) 周期的恐慌理論(二六)

第三節 商品の分析と貨幣の必然性……………二六八

商品の内部に含まれている労働の二重性格 具体的有用的労働
抽象的人間の労働 価値形態論の重要性 私的労働の「二重
の社会的性格」 私的労働と社会的労働の対立——「商品の物
神的性格」—— 商品の物神的性格の根源 商品形態の神秘性
古典学派における価値形態論の欠除とその原因 価値形態論
の課題 価値形態論展開の論理 簡単な価値形態の論理構造
「開展された価値形態」 一般的価値形態 価値形態の「もつと
も完成した形としての貨幣形態 プルジョア経済学における
「貨幣価値観」への批判

第四節 矛盾の自己展開と周期的恐慌論の構造……………二〇三

もつとも一般的・抽象的な形態における「恐慌の可能性」 資
本の蓄積と恐慌地盤の発展 社会的総資本の流通および再生産
——恐慌のより具体的な可能性—— 資本の総過程における恐
慌理論の具体化 『資本論』における恐慌分析の抽象段階とそ
の歪曲——その一、現実的恐慌論証の失敗 その二、ネガティ
ブ均衡論 マルクスにおける恐慌理論の最後の目標——周期的
恐慌と体制転換

ブック・リスト——一般的過剰生産不可能論と過少消費論
(MIOH) ロードベルトウスとフォン・キルヒマン (MIOH) 「ナ

「ロートニキ」と「合法マルクス主義者」(三〇五)

あとがき

人名索引

序章 経済学史の本質と課題

よく指摘されるように、従来の経済学史の書物には、次の三つの型がある。第一は、過去の時代に属する経済学者たちを、学派別にまたは国別に、ほぼ年代順に並べて、かれらの生涯を語り、その主要な著書および論文の標題をかかげ、それらの著書および論文が執筆された時期や出版された年、諸種の版本の異同等を考証し、進んでは、その内容を概説するといった型である。この型の代表的な通史としては、例えばジードおよびリストの『経済学説史』(C. Gide et C. Rist: *Histoire des doctrines économiques*. 1909.)やヘネーの『経済思想史』(L. H. Haney: *History of economic thought*. 1911.)などがあって、初学者に経済諸学説の要領のよい鳥瞰図的なスケッチを与え、入門書としてはまことに便利である。これを近代経済学史についていえば、時代の移るにつれて、比較的近代に属する経済学者たちを順々に取りあげるわけであって、例えばジードおよびリストの『経済学説史』についていえば、一九一三年の第二版以来、機会のあるごとに新しい経済学者を追加してゆき、一九四七年の増補七版では、フィッシャー(I. Fisher, 1867-1947)・シムチャヤン(W. C. Mitchell, 1874-1948)・シミアン(F. Simiand, 1873

—1935）、ケインズ（J. M. Keynes, 1883-1946）、ハーバラー（G. Haberler, 1900—）にまで及ぶ、
というたぐいである。しかしこのような経済学史は、諸々の経済学説をとりあげる基準が明確
でなく、もっともよい場合にも、経済学史的な史料集成および史料批判の域を脱せず、悪くす
ると、経済学説に関する話の泉式な知識の寄せ集めに、終ってしまふ場合も多い。したがって、
いずれにしても、それが一個の統一的な科学としての経済学史たりえないことは、いうまでも
ないであらう。

* 誤解を避けるために一言しておく。一般に歴史学が、その不可欠の準備作業として、もっとも厳密周到な史料の
聚集および批判を行わなければならないように、経済学史もまた、その準備段階において、経済学史上の諸資料に
つき、極めて厳密周到な聚集および批判を行わなければならないことは、いうまでもない。のちに述べる第二第三
の型の経済学史家の亜流が、その公式主義的な論証の過程において、ややもすれば、第一次資料たる原文献を忠実
正確に検討することを怠ったり、これを故意に鋳型にはめて解釈したりするのにくらべれば、この第一の型の経済
学史書の最良のものが、史料の聚集および解釈につき、極めて良心的な用意を示すとき、経済学史的な研究の進歩
に貢献するものが果していずれであるかは、いわずして明かであらう。

なおこの点については、比較的簡単な説明しか行えない通史的な書物よりは、個々の経済学説についての定評の
あるモノグラフィ―、さかのぼっては、正確な文献目録や原文または翻訳の著作集の如きものの重要性を、忘れて
はならない。

第二の型は、著者が唯一の正しい経済理論と考える理論の立場に立ち、過去の経済学史は、
この唯一の真理に向って自己展開してきたものである、とみる型である。すなわち、この立場